

令和２年度 碧南市地域福祉計画推進委員会 会議録

1 日時

令和３年２月２６日（火）午前１１時から午前１１時１５分まで

2 場所

へきなん福祉センターあいくる １階 会議室１・２・３

3 出席者及び欠席者

(1) 出席者（各種団体の代表者）

河原厚司、長谷基宏、禰宜田知司、古井露子、鈴木たか子、牧野昭彦、對馬幸司、永坂幸子、鳥居寛英、立花明德

(2) 欠席者

服部千代美、磯貝雅樹

(3) アドバイザー

日本福祉大学社会福祉学部 野尻紀恵 教授

(4) 事務局職員

ア 碧南市役所

福祉こども部長 杉浦秀司、福祉課長 杉浦浩二、福祉課社会福祉係長 河原睦、社会福祉係主査 沼田京子、社会福祉係主事 杉浦久美子、澤田直也、板倉尚宏

イ 碧南市社会福祉協議会

地域福祉課長兼地域福祉係長 鈴木利男、地域福祉係主査 古川裕隆、小島誠司

4 傍聴者

０人

5 議事

(1) 議題

へきなん地域福祉ハッピープランの令和２年度の進捗状況について

(2) その他

6 議事の要旨

(1) 議題

へきなん地域福祉ハッピープランの令和２年度の進捗状況について
事務局が会議資料に基づき説明し、その後審議した。

<主な意見・質疑>

【委員】：質問というより意見であるが、一般的に行政計画は税金をかけるものであるため、費用対効果を考えなければいけない。そのため、進捗状況として何%できて、どういった成果があったか、達成できたのかなど、見えるようにすべきだと思っている。しかし、野尻先生の言葉にもあったように、社会福祉というのは、やはり「ひとりも取り残さず」ということが大切であり、計画としての終わりは存在しないものであると思う。地域では、様々な考え方の人がおり、援助する側の人間が、対象者から断られることもあるが、「対象者からの援助拒否」という言葉は絶対に言ってはいけない言葉だと思う。援助拒否ではなく、私たち支援者の力が足りなくて、その方の心まで支援者の言葉が届かなかった、支援者の力不足であったと考えるべきだと思う。このようなことは、行政も社協も十分承知の上だと思うが、税金を使う以上は進捗状況や費用対効果、達成状況なども考えないといけないものの、ひとりも取り残さず、ということが最終目標であるので、本当に終わりのない計画だと思うが、より一層、協力して推進していった欲しいと思う。

(2) アドバイザー（日本福祉大学社会福祉学部 野尻紀恵 教授）による総括

ずっと碧南市に関わっているが、碧南市では行政の理解が進んでいて、数値にこだわらず思い切って地域福祉を進めていると感じている。こんなに評価をしづらい計画をつくり、推進していこうとする市はそんなにない。普通は目標数値を入れているが、碧南市では、「地域福祉は数値目標ではない」という覚悟を持ってやっていただいていると認識している。地域での推進活動を通じて、少しずつでも地域福祉が浸透していくように、私たち一人ひとりが力を発揮していかなければならないことを改めて感じた。特に新型コロナの時期であったので、せっかくここまで高まってきた地域とつながりを持つ気持ちを今年度はなかなか生かすことができなかった。しかし一方で、だからこそそのつながりも生まれているはずだ。やれなかったこともあるが、今年度の変化や、逆にやることができた事例を集めておくと、新型コロナの終息後にもスムーズに地域の活動を始めることができると思う。

近年、福祉のあり方が変わってきていると感じる。地域福祉、つまり地域で生きていくことをベースにして、サービスや制度も使いながら、助け合うことが必要であり、認知症の方でも、障害があっても、皆で生きていける地域をつくろうとするとき、こ

れまでの福祉教育では成り立っていないと感じている。福祉教育については、福祉実践教室を引き続き行う、という話も先ほどあった。この会議には学校の先生方も出席されているが、ぜひ力を貸していただきつつ、ここで議論していることを子どもたちと一緒に考えていきたい。子どもたちが障害者や高齢者を知るだけでなく、地域福祉についても考えていける、その材料として推進会議やハッピープランが活かされるのではないかと思う。こうしたことも社協や市役所の方とともに、団体などの代表者だけでなく、皆で考える一歩を踏み出していきたい。次年度も委員会をご一緒すると思うが、目には見えなくても、10年、20年経った時に、「あの時にあのよう議論していてよかった」という碧南市であるようにしていきたいので、今後ともお力添えをよろしくお願いしたい。